

年とった栗毛の馬

昔むかし、野牛がまだ大草原の主だったころ、あるインディアンのキャンプに、まずしいおばあさんがいました。おばあさんには、男の子の孫がありました。孫は、心のやさしい少年でした。けれども、自分の馬を持たず、いくさのためのかざり道具も持っていませんでした。

ふたりは、ほかの人のすてた物や残り物を拾ってくらしていました。キャンプが移動するたびに、その跡をさがしまわって、使えそうなものを拾いました。それで、みなにばかにされ、だれからも相手にされませんでした。

ある日のこと、ふたりは、いつものように、移動する人たちの列のさいごを歩いていました。すると、道ばたに、年とった栗毛の馬が立っていました。馬は、持ち主にすてられたらしく、すっかり疲れきり、ほとんど立ってられないほどでした。かたほうの目はまったく見えず、もうかたほうも光がなく、せなかは腫物だらけで、もじやもじやの毛皮から、あばら骨がうき出ています。馬は、何もかもどうでもいいというように、じっと動きませんでした。

おばあさんは、その馬を拾うことにして、「荷物を運べるようだといんだけどね」といって、馬のせなかに荷物をくくりつけました。

人びとは、大きな岩が水の中につき出て、川が北へ曲がっているところまで来ると、キャンプをはりました。秋の野牛狩りのためのキャンプです。ここからいくつかのグループに分かれて大草原へ出ていき、野牛をつかまえて肉をとって冬にそなえるのです。

おばあさんと少年が、おいぼれ馬をつれて追いついてくると、みんなはお腹をかかえてわらいました。

つぎの朝、狩りの見はりがキャンプに帰ってきて、

「大草原に野牛の大きな群れがいる。そのなかに白い子牛がいるぞ」とつたえました。白い野牛の皮にはたいへんな魔力があるのです。首長は、

「その白い子牛をつかまえてきた者に、むすめを妻としてあたえよう」といいました。

男たちは、狩りのしたくをし、いちばんいい馬に乗って、念入りに弓矢と馬をしらべて

から、キャンプを出発しました。少年は、古いやりを持っておいぼれ馬に乗ると、みんなのあとについていきました。

男たちは、少年に気がつくつと、

「見ろよ、白い野牛の皮を持って帰ろうっていうおいぼれ馬がいるぞ」と、大わらいしました。少年は、わらい声を聞かずにすむように、立ちどまって後にのこり、みんなが見えなくなるまで待ちました。それから、ひとりで野牛の群れに向かつて馬を進めました。するととつぜん、馬が口をきいていいました。

「あの小川のほとりに行って、私のからだに、毛が一本も見えなくなるまで粘土ねんどをぬりつけなさい」

少年はおどろきました。いわれたとおり、小川のほとりまで行きました。粘土をすっかりぬりおわると、馬はいいました。

「さあ、乗りなさい。でも、私が合図するまでここから動いてはいけません。あなたをわらいものにした男たちを追ってはいけません」

さて、男たちは丘おかに着きました。そこからは野牛の群れを見わたすことができました。

男たちは、丘のうしろで首長の合図を待っていました。やがて首長が手をあげて、「行け」と合図しました。

馬は速足はやあしでかけだし、男たちは、丘の西がわからまわりこんで野牛の群れをとりかこもうとしました。

そのとき、おいぼれ馬が合図しました。少年は、東のがわから、群れめがけてまっしぐらに馬を走らせました。少年と馬は風のように野牛の群れにとびかかりました。そして、野牛のかげにすがたを消したかと思うと、少年はもう野牛のせなかにいました。やりが太陽にきらめいて、白い子牛はたおれて見えなくなりました。群れはおどろき、ものすごい音を立てて走りだしました。そのあいだにも、少年は野牛を二頭たおしました。

やがて少年は馬からおりて、ゆうゆうと白い子牛のはらわたをぬき、皮をはぎはじめました。栗毛の馬はそばに立って頭を高くあげていました。もうおいぼれ馬らしいところはまったくなく、せすじをびんとはって立っていました。

少年は、肉を馬のせなかに乗せ、白い皮を上にかけて、馬を引いてキャンプにもどっていきました。そのとき、ひとりの若い男わかが追いついてきて、白い皮と馬十二頭じゅうにとうを交換しな

いかといいました。首長のむすめとどうしても結婚けつこんしたかったからです。少年は、わらいとぼしてことわりました。

少年が白い野牛をたおした話は、すぐにキャンプにつたわりました。先にもどった男がおばあさんに、

「あんたの孫が白い子牛を打ちたおしたぞ」といいました。おばあさんは信しんじられず、からかわれているのだと思って、

「どうして、わたしをおこらせようとするんだい。そんなうそをつかれるようなこと、わたしはしたかい。ほうっておいておくれ」といいました。

そこへ、少年が帰ってきて、馬から肉と皮をおろしました。

「ほら、少しばかりの物をとってきたから、今日も明日もおなかをへらさずにすむよ」

おばあさんは、この馬がほんとうにあのおいほれ馬なのかと何度もたずねました。

つぎの日の晩ばん、馬がまた口をきいていました。

「あしたの朝、スー族ぞくがキャンプをおそってきます。敵てきの戦士せんしが馬で乗りつけるのを見たら、わたしに乗って敵の中につっこみなさい。おそれることはありません。あなたの身はどうということはないんですから。あなたは、敵の首長を見つけてころすことになるでしょう。四回までは、攻撃こうげきしてもあなたがきずつくことはありません。でも、それでやめておきなさい。五回目には、あなたがころされるか、わたしが死ぬか、どちらかになるでしょうから」

つぎの朝、夜が明けるか明けないうちに、見はりがキャンプに走ってきて急をつけました。丸くならんだテントの前にスー族が馬で乗りつけるのが見えました。敵のおたけびが朝の空気をすどく切りさきました。

村の男たちがまだ戦いの隊列たいれつを整えているうちに、少年は馬にまたがり、トマホークを手にして敵につっこんでいきました。敵は、ただ一騎いっきが首長をねらっているのに気がついて、矢の雨をあびせました。けれども矢は当たらず、少年は無傷むきずで敵の首長に追いつきました。そして、たちまち頭の皮をはぎとって帯おびにつけ、味方のもとにかけもどりました。

少年は、さらに三回、敵のなかへおどりこんで、そのつど頭の皮をひとつずつ取りました。

それから少年は、五回目の攻撃をかけました。すると、馬が矢の雨をあびてたおれ、少年はようやくやくのことで助けられました。

敵は、この馬には何かあるにちがいないと思い、馬の体を小さく切りきざんで、あたり一面にまきちらしました。そして、夕方になってようやく引きあげていきました。

少年は、長いあいだ、馬のおれたところをさがしつづけました。そして、見つげられるかぎり、馬の骨や肉を集めてつみあげました。それから、少しはなれた丘の上に登り、野牛の皮のマントを頭からはずして、馬の死をかなしみました。

かみなりが鳴って雨がふっても気にもせず、少年は、骨の山ばかり見つめていました。その晩、二度目のかみなりが鳴り、雨が音を立ててふつてきました。やはり馬のことは考えませんでした。三度目のかみなりが鳴ってものすごい雨がふり、ほとんど手の先も見えないほどになりました。雨がやんだとき、骨の山は形がかわって、馬が横たわっているように見えました。でも、見まちがいかもしれません。四度目のかみなりが鳴り雨がふってきたとき、少年は、とつぜん、馬が立ちあがるのを見ました。馬はこちらをうかがい、声高くいななきはじめました。少年は、雨の中を走って馬にかけよりました。馬はいいました。

「どうふるまわなければならぬか、今はわかったでしょう。偉大な霊がわたしをよみがえらせました。こんどいうことをきかなければ、ふたたびわたしを失うことになるでしょう」

少年は、馬の言葉にしたがって、それからというものの、馬にしるといわれないことは、けっしてしませんでした。

少年は、首長のむすめと結婚し、やがて自分が首長になりました。そして、栗毛の馬をたいせつにし、お祭りのときにだけキャンプの中を乗ってまわりました。

やがて少年は、年をとってなくなると、白い野牛の皮につつまれて壇だんの上におかれしました。そして、大草原と高い天にいつまでも見守られることになりました。

栗毛の馬は、そのときからのちすがたを消し、どこへ行ったのかを知る人もなく、ふたたび見た人もいませんでした。

原話：『世界の民話⑫アメリカ大陸』関楠生訳／ぎょうせい

再話：村上郁